

高知市立自由民権記念館学芸員

浜田 実佑さん(30) 高知市旭町1丁目

649 人目



高知市立自由民権記念館(同市桜橋通4丁目)

通4丁目)の史料収蔵庫。温度23度、湿度55%を保たれた庫内の壁一面にケースや資料棚などが並び、そこに約7千点の史料が保管されている。

その中から二つを手に取る。自由民権運動家だった細川義昌の母、樋(1826~1905年)が明治期に記した「日記おばへ帳」。明治の女性の暮らしや日々の出来事、当時の物価などが、女性ならではの視点で書かれていて面白いです。約30枚の和紙がじてじて面出しています。

られた日記帳等々、事にめぐり、目を落とす。「明治の女性が書いた日記はほとんど残っていない。高知の女性史を研究する上で、すこし貴重な史料です」

歴史の魅力柔軟に発信

写真・反田浩昭
◆月曜日掲載

役を任された。構想から史料調査、展示まで約1年かけて準備し、日本の女性参政権運動を高知の運動家とともに紹介した。「開館30周年の冠まで付けて、すごくプレッシャーだった」と苦つて思いました」と笑う。

転機となったのは大学3年で履修した学芸養成講習。進路に悩む中、専門知識を多くの人に伝える仕事に魅了を感じ、資格を取得した。大学院を経て、教育費及専門の学芸員として県内の歴史博物館に2年ほど勤めた。自由民権記念館に来たのは2年前の春。今では史料の調査・研究から展示解説、学校での出前授業まで幅広い仕事を任せられているが、知識不足を痛感するところ。特に苦戦するのは「崩し字」の読み解だ。「ある意味『言葉の壁』。いろんな人に教えてもらいつつ、辞書片手に闇黙する日々です」。学芸員らで行う古文書の朗読会など少しでも感覚を磨き、手が空けば近代史の学術書を開いて歴史の勉強に励む。

学校での出前授業など教育費及活動にも力を注ぐ。一昨年、昨年と小学校6年生のクラスに出向き、自由民権運動的魅力を説いた。「全く歴史に興味なきそうな子が私の話を『えー、すごい』って夢中で聞いてくれるのがうれしくて。歴史の面白さを少しでも感じて貰ってくれれば」



新規コロナウイルスの影響で、博物館や美術館を取り巻く環境が激変する。昨今、施設によっては、「コロナ禍を機にインターネット上で史料を紹介したりと新しい取り組みを進めている。

「どれも館に向かっていだたいたためにも、いろんな所にアシテナを張つて、より多くの人に歴史の魅力がない主義。歴史博物館を次の時代に残すためには、時代に合わせ柔軟な発想ができない」と語る。」だ。

